

2009夏・操山高校1年生句歌詩優秀作選

【俳句】

生徒・保護者選句

一席 72票（生徒44・保護者28）
扇風機「ああ」と気分は宇宙人 5組アサ

二席 60票（生徒19・保護者41）
散りてなお地に花咲かす桜かな 5組岡恵理

三席 46票（生徒33・保護者13）
一瞬にすべてを懸けるセミと僕 2組ぶー

佐々木六戈氏選句

向日葵や我の背丈の伸びし頃 4組健志哉成善
仏壇の白桃一つ香りけり 4組おねこ
踏み切りが上がるのを待つ夕日かな 4組てんか

風鈴やお前も俺も待つ身なり 6組ジェットストリーム
風鈴やお前と俺と待つ身なり 佐々木氏助言

おそろいの半ズボン日焼け笑い合う 6組東京アカデミー

滝に行きテストの点を流したい 7組クッキー

【短歌】

生徒・保護者選歌

一席 115票（生徒41・保護者74）
「おそうめんできたよおいで」と言う母に「さつきはごめん」が言えずただ食う 3組トマト

「おそうめんできたよおいで」と言う母に「さつきはごめん」言えずただ食う 佐々木氏助言

二席 87票（生徒48・保護者39）
よしやろつやろつと決めて三日間未だ登れず宿題の山 4組いちこ

よしやろつよしやろつと宿題の山三日間未だ登れず 佐々木氏助言

三席 55票（生徒29・保護者26）
落ちるなど淡い期待を抱けどもポトリと落ちた線香花火 1組枝豆

佐々木六戈氏選歌

青空が恋をしている向日葵は片思い中あの太陽に 1組翔
今朝もまた地震情報耳にして揺らぐ日本を建て直す気か 3組スーパースター

「夏は夜」と言ひし彼女に対抗し私も言おう「夏はカルピス」 5組鳴海一夫

汗しみるTシャツはためく炎天下自転車ペダル鼓動のごとく 5組六

まっすぐに迷わずのびる一本道夕暮れの土手僕はうらやむ 6組くたびれたサンダル

限界は俺が思うほど近くないぶつかるまではやってみようか 7組林檎飴

限界は俺が思うほど近くないぶつかるまではいつもの韋駄天 佐々木氏助言

！左記の短歌の下句を接続すると「応答性」が生まれる 鳴り止まぬ三つの目覚し母の声鋭角秒針いつもの韋駄天

5組壬辰丁酉の倭乱

【詩】

生徒・保護者選詩

一席 61票（生徒19・保護者42）

高校生になった私は十六歳になった私はどこにも居場所がない

4組コルト

大人ほど大きくはないし責任なんか持つ自信もないだからといって

子どもほど小さくはないしきちんと考えて行動くらいできる

まるで枝から落ちてひらひらと舞う葉っぱのように空中をただただひたすらに漂う

たまに風が吹けば
簡単にそつちに流されてしまう
そんなちっぽけな存在

きちんと地面にたどりつけるかな
そんな不安を抱きながら
今日もまた一人漂っている

二席 60票（生徒32・保護者28）

空

2組めりつと

空はいつもそこにある

試合中空を見上げれば

ピンチのときも

チャンスするときも

いつも変わらずそこにある

三席 59票（生徒31・保護者28）

7組VVVFPPWM

「あつ。」

一瞬の事だった。

私の肘が柱にぶつかった。

透明なガラスのコップが宙を舞う。

超高熱の炉で命の息吹をこめられ

美しく誕生したコップが

今不運にもその一生を閉ざそうとしている。

飲み終わった後のわずかな麦茶とともに

鮮やかに身をひねりながら

確実に地球の中心へと引き寄せられる。

長年浴び続けた部屋の照明に

涙にも見える小さな反射をくりかえし

その身に部屋の景色を映し出す。

嗚呼これはコップの走馬灯か。

ごちゃごちゃしたテーブルと

ニュースを知らせる液晶テレビと

まだ昨月のカレンダーと

破れた襖と

自分を愛用し

そして終焉をもたらした私を

次々に映しだす。

そうだ、この景色こそ

このコップの記憶だ。

光の点は淵の一部に集合し

ダイヤのように光った。

別れのあいさつのように……

私が咄嗟に差し出した左手に

コップはその影を落とし

安らかな手に包まれた。

コップは手の中で輝き

私の笑顔を映し出した。

佐々木六戈氏選詩

佐々木氏の助言による変更後

1組海音

相変わらず終末感が漂っている

イライラした空気が世界を襲って

暗闇で振り回す両手もほら

虚しく弧を描くだけ

クリック一つで何だって手に入る

知らなきゃ良かったって思うことばかり

先のことまで見え過ぎて

肝心な未来が見えちゃいないんだ

もううんざりしているのは

君だって同じなんだろう？

だったらほら

鏡が映し出した歪んだ景色に手を振って

さあ準備は出来たかい？

君と僕が手を繋いで一歩踏み出す

その瞬間がスタートの合図だ

優しいうた

1組サ

ラ

夜空に輝く色とりどりの花

赤に紫

青に金

人はみんな笑顔になり

団扇を持つ手を休めて見とれる

その中に一人だけ悲しそうに見つめる老人がいる

心はどこか遠くにあるかのように

彼にはキノコ雲にしか見えなかった

一人で

無言で

彼の目の先に広がる黒くて思い煙

ヒュー ドーンという音とともに花開き

金色の大きな柳が夜空いっぱい広がった

海

1組すおれんじま

どこまでも続く青

絶え間なく打ちつける白

白

たった一文字

私の目にうつる

青と白は無限に広がる

いつか見てみたい

ずうっと続く

青と白のはじまりを

まちぼうけ。

1組 ムムリク

秋の気配を感じつつもまだ太陽が白と黒の世界をつくりだす。

私は誰を待っていたのだろう。

急に空から銀色の粒が降り出した。

それは地上の大喝采へと勢いを増す。

私はすぐさまそれから隠れた。

しばらくするとさっきまでの拍手喝采は嘘のように消えた。

その中に橋が空に架けられていた。

こういうまちぼうけもいいかもしれない。

1組 宇治金時

ダンボールに空いた穴のすきまから

本当に少しだけそそぐ太陽の光

本当に少しだけ香る夏の風

皆と一緒にぎゅっと詰められて

皆と一緒に車に乗せられて

皆と一緒にどこかへ運ばれる

それがとても私には楽しかった

ダンボールに空いた穴のすきまから

目の前を通った小さな小さな虫さん

色んな色の花さんな形の木

私だつてきれいなオレンジ色なのよ

体はころころして丸くてちよつとでこぼこして

るけ どそれだつて魅力の一つなの

ダンボールに空いた穴のすきまから

なんだかとてもいい香り

いつの間にか眠つて誰かのお家に着いたみたい

元気に走ってくるかわいらしい足音

その足音の主が段ボールを開ける

私を手にとりまたまた走る元気いっぱい

ザーザー「冷たい」

むきむき「なんだかちよつぱり恥ずかしい」

次の瞬間私は大きな大きな穴にぼつりこまれた

足音の主が喜んでいて

私もなんだか嬉しかった

皆も次々に落ちてきた

1組 ロッキーマン

この道を行くと

何処に繋がっているのだろう

この道を行くと

何が待っているのだろう

果たしてこの道で合っているのだろうか

もう十六年歩み続けている

落とし穴に落ちた。

案内人にウソをつかれた。

野生動物と戦った。

その場でうずくまった。

けれど今まで確実に前を向いてきた。

今はどうだろう

前を向いて歩いているか

上を向いて歩いているか

その答えはこれからの自分の中にある

この道を行くと

何処に繋がっているのだろう

この道を行くと

何が待っているのだろう

あ、道しるべがある

「この先、ガケです」

よし、俺の来た道は間違っていない――

六道骸

名を呼ばれ

ふりむくと視線を上を感じる

二、三年前には

見下ろしていたのに

でも今も私の名を呼ぶ
あなたの声はかわらない
いつかあなたは
私を上から見つめ
大人の声で
私を呼ぶのでしょう
そして私はあなたを
優しく見上げるでしょう

しにもの

1組雨蛙下呂下郎

とりあえず生きるのは諦めた。
夢も願いも崩れ落ちた。
果てるなら理想の中がよかったが
それも叶わないと知った。
しかし
逃げたら逃げたで
奴らは夢と願いをちらつかず。
結局どちらでも変わらないということか、
と思えてくる。
一度離れると遠いね。
いきものというやつは。
それなりの覚悟で再挑戦するもよし、
このまま情性で脱落するもよし。
まあ
どーせもう生きものじゃないんだから
ダメ元で戦ってあげる。
もう一度
死に物狂いで。

八月二十五日

5組鳴海一夫

八月が終わって九月に入る頃、その空気が私は
一番好きだ。少し湿気を帯びて暑苦しい夏の風が、
今年も気付いたら秋の風になっている。
朝、空気が澄みわたって、空が何もかもすらつ
と吸いこんでしまいそうな色をしている。けれど
陽の光は、夏よりも不思議とやさしい。
陽が落ちると、どこからともなく虫の音が聞こ
えてきた。
午後七時。私は部屋の灯もつけずに、網戸の向
こうから聞こえてくる虫たちの声に耳を澄ませる。
すると、湿り気を帯びた夏の風とは違う、さら
りとした秋の風が、私の頬をかすめた。見ると、
カーテンがフワリとふくらんではペタリと元に戻
り、まるで呼吸しているようだ。私もカーテンと
いっしょに、秋の空気を吸い込んでみた。肺いっ
ぱいに充滿する秋の空気。私の身体にも、秋の気
配が染み込んでゆくようだ。
暑い夏は終わった。

九月。

新しい私が、そこにいるような気がする。

5組郁野玲

海は何を思うのか
育て 罰し 癒し
静かに横たわり
遠い昔の約束を 覚えているか
遠く広いこの海で 永遠を誓った
変わるけど 変わらない 黎明の水
鳥たち 遠い空に羽ばたく
海の青を滑り 空の青を横切って
見上げたそこには 目一杯の光
跳ねるそこには 絡まる透明な鎖
何を思うだろう 何を思う
人間という ちっぽけな存在が
あなたと共に生きている
何を 思われますか

数字の情緒

5組壬辰丁酉の倭乱

タンジェントを追い求める
最大公約数を追い求める。
正二十面体の角を落として、
蹴って、頭突いて、
ダイヤモンドに変えようとする。

カブレカルな中で、
指数は対数を切り捨てた。

無は己を己で割り切れぬ故、
存在し得ぬ愛を認めた。

愛は、揺れ動く二人とともに、
闇を創造した。

闇は、いくらかけあわせても、
闇のままみたいだ。

キノウがドミノを倒すのを、
真っ暗闇で、
明日がただただ待っている。

余白が足りないみたいだ。

コップの記憶

佐々木氏題す

7組VVVF PWM

「あつ。」
一瞬の事だった。
私の肘が柱にぶつかった。

透明なガラスのコップが宙を舞う。
超高熱の炉で命の息吹をこめられ
美しく誕生したコップが
今不運にもその一生を閉ざそうとしている。
飲み終わった後のわずかな麦茶とともに
鮮やかに身をひねりながら
確実に地球の中心へと引き寄せられる。
長年浴び続けた部屋の照明に
涙にも見える小さな反射をくりかえし
その身に部屋の景色を映し出す。
嗚呼これはコップの走馬灯か。
ごちやごちやしたテーブルと
ニユースを知らせる液晶テレビと
まだ昨月のカレンダーと
破れた襖と
自分を愛用し
そして終焉をもたらした私を

ここで、止める

Gap

7組コンニャク問答

傘の上に雨滴が降り立つ。
運が良かったのかは分からない
取り敢えず落ちずに済んだ
ただ、これは下から抵抗するものが存在する
そういうことで落ちずに済んだ
ということである
それにしても、向こう側が見えない。

頭上が騒がしい
別にそれが何なのかは関係ない。
恐らく雨でも降っているのだろう
だが、この傘で防がれている
そういうことに何かを感じているのか
ということとは分からない
何れにせよ、向こう側は見えない。

少しずつ、傘の上を垂れてゆく
傘の端で気持ち留まる
そして落ちる
目が合う……？

どこまで生きるか

7組黒光リゲッシー

世間から 大人と呼ばれるまで
あと四年

父親が 父になった年まで
あと十年

両親が 語った思い出話すまで
あと二十一年

両親を見送る年まで生きていたい

「あと五十年」「百年」「あと一日」というかたちで逆説を
仕掛けるのも面白いという助言がありました。